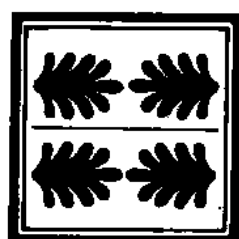


美しい村・風立ちぬ

堀 辰雄

講談社文庫

A11



講談社文庫

美しい村・風立ちぬ

堀 辰雄

昭和46年 7 月 1 日第 1 刷発行

昭和46年 9 月 日第 4 刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 3930

製 版 株式会社まゆら美研

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 和田製本工業株式会社

© Taeko Hori 1971

Printed in Japan

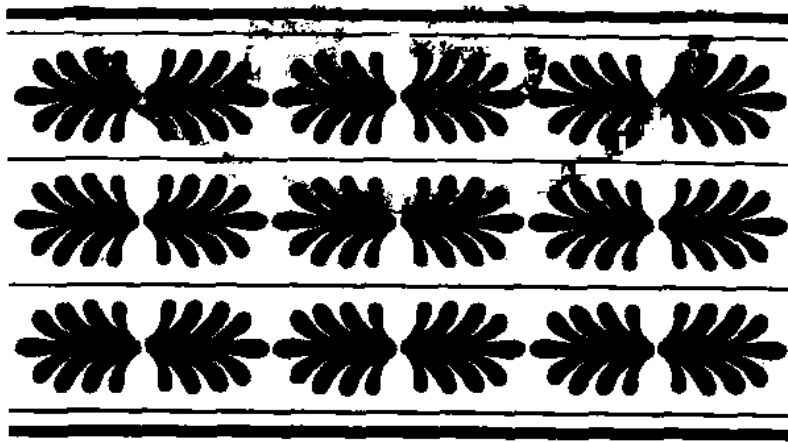
定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

土文庫

美しい村・風立ちぬ

堀 辰雄



講談社

本書は、原著の文字づかいを尊重しながら、現代表記（新字・新かな）に改めた。

〈編集部〉

目次

美しい村

七

風立ちぬ

七五

語注

一六七

解説

一七四

年譜

一八九

高橋英夫

美しい村

天の瀬氣の薄明に優しく会釈をしようとして、

命の脈がまた新しく活潑に打っている。

こら。下界。お前はゆうべも職を曠うしなかった。

そしてけさ疲が直って、己の足の下で息をしている。

もう快樂を以て己を取り巻きはじめる。

断えず最高の存在へと志して、

力強い決心を働かせているなあ。

序曲

六月十日 K：村にて

御無沙汰をいたしました。今月の初めから僕は当地に滞在しております。前からよく僕は、こんな初夏に、一度、この高原の村に来て見たいものだと言っていました。やっと今度、その宿望がかなった訣わけです。まだ誰も来ていないので、淋しいことはそりあ淋しいけれど、毎日、気持ちのよい朝夕を送っています。

しかし淋しいとは言っても、三年前でしたか、僕が病氣をして十月ごろまでずっと一人で滞在していたことがありましたね、あの時のような山の中の秋ぐちの淋しさとはまるで違うように思えます。あのときは籐とうのステッキにすぎるようにして、宿屋の裏の山径やまみちなどへ散歩に行くと、一日ごとに、そこいらを埋めている落葉の量が増える一方で、それらの落葉の間からはときどき無気味な色をした茸がちらりと覗のぞいていたり、あるいはその上を赤腹のく（あのなんだか人を莫迦ばかにしたような小鳥です）なんぞがいかにも横着そうに飛びまわっているきりで、ほとんど人気ひとけは無いのですが、それでいて何んだかそこら中に、人々の立去った跡にいつまでも漂っている一種のにおいのようなもの、——ことにその年の夏が一きわ花やかで美しかっただけ、それだけその季節

の過ぎてからの何とも言えぬ佗^わびしさのようなものが、いわば凋落^{ちようらく}の感じのようなものが、僕自身^{みづかみ}が病後だったせい、一層ひしひしと感じられてならなかったのですが、——もっとも西洋人はまだかなり残っていたようです。ごく稀にそんな山径で行き逢いますと、なんだか病み上がりの僕の方を胡散^{うさん}くさそうに見て通り過ぎましたが、それは僕に人なつかしい思いをさせるよりも、かえってへんな佗^わびしさをつのらせました…… ———— そんな佗^わびしさがこの六月の高原にはまるで無いことが何よりも僕は好きです。どんな人気のない山径を歩いていても、一草一木ことごとく生き生きとして、もうすっかり夏の用意ができ、その季節の来るのを待っているばかりだと言った感じがみなぎっています。山鶯^{やまう}だの、閑古鳥^{かんこ}だのの元氣よく囀^{さえず}ることといったら！ すこし僕は考えごとがあるんだから黙^{もく}っていてくれないかなあ、と癪^{さか}癪^{さか}を起したくなるくらいです。

西洋人はもうぼつぼつと来ているようですが、まだ別荘などは大概閉^{とぎ}ざれています。その閉ざれているのをいいことにして、それにすこし山の上の方だと誰ひとりそこいらを通りすぎるものもないので、僕は氣に入^{かっこ}った恰好^{かっこ}の別荘があるのを見つけると、構わずその庭園の中へはいつて行^いって、そここのヴェランダに腰を下ろし、煙草などをふかしながら、ぼんやり二三時間考えごとをしたりします。たとえば、木の皮茸^{かわぶ}きのバンガロオ、雑草の生い茂った庭、藤棚（その花がいまちようど見事に咲いています）のあるヴェランダ、そこから一帯に見下ろせる樅^かや落葉松^{らくえつしょう}の林、その林の向うに見えるアルプスの山々、そういったものを背景にして、一篇の小説を構想したりなんかしているんです。なかなか好い氣持です。ただ、すこしばんやりしていると、まだ生

れたての小さな蛸が僕の足を襲ったり、毛虫が僕の帽子に落ちて来たりするので閉口です。しかし、そういうものも僕には自然の僕に対する敵意のようなものとしては考えられません。むしろ自然が僕に対してうるさいほどの好意を持っているような気さえします。僕の足もとになど、よく小さな葉っぱが海苔巻のように巻かれたまま落ちていますが、そのなかには芋虫の幼虫が包まれているんだと思うと、ちよつとぞつとします。けれども、こんな海苔巻のようなものが夏になると、あの透明な翅をした蛾になるのかと想像すると、なんだか可愛らしい気もしないことはありません。

どこへ行っても野薔薇がまだ小さな硬い白い蕾をつけています。その咲くのが待ち遠しくなりません。これがこれから咲き乱れて、いいにおいをさせて、それからそれが散るころ、やつと避暑客たちが入り込んでくることでしょう。こういう夏場だけ人の集まってくる高原の、その季節に先立って花をさかせ、そしてその美しい花を誰にも見られずに散って行ってしまうさまざまな花（たとえばこれから咲こうとする野薔薇もそうだし、どこへ行っても今を盛りに咲いている躑躅もそうです）——そういう人馴れない、いかにも野生の花らしい花を、これから僕ひとりきりで思う存分に愛玩しようという気持は（なぜなら村の人々はいま夏場の用意に忙しくて、そんな花などを見てはいられませんから）何ともいえずに爽やかで幸福です。どうぞ、都会にいたたまれないでこんな田舎暮らしをするようなことになっている僕を不幸だとばかりお考えなさいで下さい。

あなた方はいつ頃こちらへいらっしゃいますか？

僕はほとんど毎日のようにあなたの別荘の

前を通ります。通りすがりにちょっとお庭へはいってあちらこちらを歩きまわることもありま
す。昔はあんなに草深かったのに、すっかり見ちがえるくらい、綺麗な芝生になってしまいまし
たね。それに白い柵などをおつくりになったりして。……何んだかあなたのお庭のお庭へはい
ても、まるで他の別荘の庭へはいっているような気がします。人に見つけられはしないかと、心
臓がどきどきして来てなりません。どうしてこんな風にお変えになってしまったのか、本当にお
うらめしく思います。ただ、あなたとそこでよくお話したことのあるヴェランダだけは、そっく
り昔のままですけれど……

ああ、また、僕はなんだか悲しそうな様子をしてしまった。しかし、僕は本当はそんなに悲し
くはないんですよ。だって僕は、あなた方さえ知らないような生の愉悦を、こんな山の中で人知
れず味っているんですもの。でも一体、いつごろあなたはこちらへいらっしゃるのかしら？
あなた方とはじめて知り合いになったこの土地で、あなた方ともう見知らない人同志のように顔
を合せたりするのは、たいへんつらいから、僕はあなた方のいらっしゃる前に、この村を出発し
ようかと思えます。どうぞその日の来るまで僕にもここにいてることを、そしてときどき誰も見
ていないとき、あなたの別荘のお庭をぶらつくことをお許し下さい。

またしても、何と悲しそうな様子をするんだ！ もう、止めます。しかし、もうすこし書かせ
て下さい。でも、何を書いたものかしら？ 僕のいま起居しているのはこの宿屋の奥の離れで
す。御存知でしょう？ あそこを一人で占領しています。縁側から見上げると、ちょうど、母屋
の藤棚が真向うに見えます。さっきもいったように、その花がいま咲き切っているんです。が、

もう盛りもすぎたと見え、今日^{きょう}あたりは、風もないのにぽたぽたと散りこぼれています。その花に群がる蜜蜂といったら大したものです。ぶんぶんぶんぶん唸^{うな}っています。——この手紙を書きながら、ちよつと筆を休めて、何を書こうかなと思つて、その藤の花を見上げながらばんやりしている、なんだか自分の頭の中の混乱と、その蜜蜂のうなりとが、ごっちゃになって、そのぶんぶんいつているのが自分の頭の中ではないかしら、とそんな気がしてくるくらいです。僕の机の上には、マダム・ド・ラファイエットの「クレエヴ公爵夫人」が読みかけのまんま頁^{ぺーじ}をひらいています。はじめてこのフランスの古い小説をしみじみ読んでいますが、そのお蔭でだいぶ僕も今日このごろの自分の妙に切迫した気持から救われているような気がしています。この小説についてはあなたに一番その読後感をお書きしたいし、また黙つてもいたい。二三年前、あなたに無理矢理にお読ませした、ラジイゲの「舞踏会」^{*}は、この小説をお手本にしたと言われているくらいですから、まあ、あれに大へん似ています。しかし「舞踏会」のときは、まだあんなにこたわらずに、その本をお貸しが出来たけれど、そしてそれをお読みになつてもあなたは何もおっしゃらなかったし、僕もそれについては何もお訊^ききしなかったが、それでも或る気持はお互いに通じ合っていたようでしたけれど、いま僕は、あの時のようにこたわらずに、この小説の読後感をあなたにお書きできるかしら？

第一、この手紙にしたつて、筆をとりながら、果してあなたに出せるものやら、出せそうもないものやら、心の中では躊躇^{ためら}っているんです。おそらく出さずにしまうかも知れません。……こんなことを考え出したら、もうこの手紙を書き続ける気がしなくなりました。もう筆を置きま

す。出すか出さないか分りませんが、ともかくも左様なら。

美しい村

或は 小遁走曲*

ある小高い丘の頂きにあるお天狗様てんぐのところまで登って見ようと思って、私は、去年の落葉ですっかり地肌の見えないほど埋まっているやや急な山径をガサガサと音させながら上って行ったが、だんだんその落葉の量が増して行つて、私の靴がその中に気味悪いくらい深く入るようになり、腐った葉の湿り気がその靴のなかまで滲み込んで来そうに思えたので、私はよっぽどそのまゝ引つ返そうかと思つた時分になつて、雑木林の中からその見棄てられた家が不意に私の目の前に立ち現れたのであつた。そうしてその窓がすっかり釘づけになつていて、その庭なんぞもすっかり荒れ果て、いまにも壊れそうな木戸が半ば開かれたままになつてゐるのを認めると、私は子供らしい好奇心で一ぱいになりながらその庭の中へずかずかと這入はいつて行つた。

そうして一めに生い茂かつた雑草を踏み分けて行くうちに、この家のこうした光景は、数年前、最後にこれを見た時とそれが少しも變つていないような気がした。が、それが私の奇妙な錯覚であることを、やがて私のうちに蘇よみがえつて来たその頃の記憶が明瞭にさせた。今はこんなにも雑草が生い茂つてほとんど周囲の雑木林と区別がつかないくらいにまでなつてしまつてゐるこの

庭も、その頃は、もつと庭らしく小綺麗になっていたことを、漸く私は思い出したのである。そうしてつい今しがたの私の奇妙な錯覚は、その時からすでに経過してしまつた数年の間、もしそれがそのままに打棄^{うちすて}られてあつたならば、おそらくはこんな具合にもなつてゐるであらうに……という私の感じの方が、その当時の記憶が私に蘇るよりも先きに、私に到着したからにちがひなかつた。しかし、私のそういう性急^{せうかち}な印象が必ずしも贗^{にせ}ではなかつたことを、まるでそれ自身裏書きでもするかのように、私のまわりには、この庭を一面に掩^{おほ}うて草木が生い茂るがままに生い茂つてゐるのであつた。

そのヴェランダにはじめて立つた私は、錯雑した樅の枝を透して、すぐ自分の眼下に、高原全帯が大きな円を描きながら、そしてここかしこに赤い屋根だの草屋根だのを散らばらせながら、横わつてゐるのを見下ろすことが出来た。そうしてその高原の尽きるあたりから、また、他のいくつもの丘が私に直面しながら緩やかに起伏してゐた。それらの丘のさらに向うには、遠くの中央アルプスらしい山脈が青空に幽^{かす}かに爪でつけたような線を引いてゐた。そしてそれが私のきざきざな地平線をなしてゐるのだつた。

夏毎にこの高原に来ていた数年前のこと、これと殆んどそっくりな眺望を楽しむために、私はしばしば、ここからも少し上方にあるお天狗様まで登りに来たのだけれど、そのたびごとに、この最後の家の前を通り過ぎながら、そこに毎夏のようにいつも同じ二人の老嬢が住まつてゐるのを何となく気づかわしげに見やつては、その二人暮らしに私はひそかに心をそそられたものだった。——だが、あれはひよつとすると私自身の悲しみを通してばかり見ていたせいかも知れ

ないぞ？（と私は考えるのだった。）なぜって、私がこの丘へ登りに来た時は、いつも私に何か悲しいことがあって、それを肉体の疲労と取り換えたためだったからな。真白な名札が立って、それにはMISSのついた苗字が二つ書いてあったつけ。……そう、その一方が確かMISS SEY MOREという名前だったのを私は今でも覚えてる。が、もう一方のは忘れた。そうしてその老嬢たちそのものも、その一方だけは、あの銀色の毛髪をして、何となく子供子供した顔をしていた方だけは、今でも私の眼にはつきりと浮んでくるけれど、もう一方のはどうしても思い出せない。昔から自分の氣に入った型の人物にしか関心しようとしないう自分の習癖が、（この頃ではどうもそれが自分の作家としての大きな才能の欠陥のように思われてならないのだけれど、）この老嬢たちにも知らず識らずの裡に働いて見たものと見える。

……この数年間というもの、この高原、この私の少年時の幸福な思い出と言えはるその殆んど全部がここに結びつけられているような高原から、私を引き離していた私の孤独な病院生活、その間に起ったさまざまな出来事、忘れがたい人々との心にもない別離、その間の私の完全な無為。……そして、その長い間放擲していた私の仕事を再び取り上げるために、一人きりにはなりたいし、そうかと言ってあんまり知らない田舎へなんぞ行ったら淋しくてしょうがあるまいからと言った、例の私の不決断な性分から、この土地ならそのすべてのものが私にさまざまな思い出を語ってくれるだろうし、そして今時分ならまだ誰にも知った人には会わないだろうしと思つて、こんな季節はずれの六月の月を選んで、この高原へわざわざ私はやって来たのであった。が、数日前にこの土地へ到着してから私の見聞きする、あたかも私のそういう長い不在を具象す